

エー  
A G 5 だより在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)アスンシオン日本人学校における教材開発と  
社会科副読本の作成

AG5 研究員・中央大学教授 森茂岳雄

日本から直線距離（航空距離）で約18,000km離れた地球の反対側にあるパラグアイ共和国の首都アスンシオンに、AG5プログラムの拠点の一つである在外教育施設「アスンシオン日本人学校」があります。同校におけるAG5の研究テーマは、「南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発とそのための教員研修プログラム開発」です。今月のAG5だよりでは、その一環で行われた「アスンシオン日本人学校における教材開発と社会科副読本の作成」についてご紹介します。

一 アスンシオン日本人学校  
の研究テーマ

現在、パラグアイにはアスンシオン、シウダー・デル・エステ、エンカルナシオンの都市のほか、地方の六つの日本人移住地（ラ・コルメナ、チャベス、ラ・パス、ピラポ、イグアス、アマンバイ）を中心に七〇〇〇人を超える日系人が暮らしています（パラグアイ日本人会連合会人口センサス参照）。本プロジェクトでは、これらの日系人コミュニティや、日本型教育の発信・普及を行っている他の教育施設に対してアスンシオン日本人学校がどのような役割を果たしているかが課題となっています。「他の教育施設」とは、上記九つの日系コミュニティにある日本語学校、及びアスンシオンにある「日本型教育」を行っている私立学校である日本パラグアイ学院とニホン・ガッコウです。この二校に通う子ども達のほとんどが非日系パラグアイ人です。本プロジェクトの初年度（二〇一七年度）は、これらの教育施設の見学や、当該施設の教員を対象にした授業力アップのための研修（日本での研修を含む）を通して、日本人学校と他の教育施設とのネットワークづくりが行われました。これらの経

験を通して、日本語学校をはじめとする現地の教育施設では、次のような教育のニーズがあることがわかりました（AG5研究レポート参照）。

- ① 教師の力量形成
- ② 日本型教育の提供
- ③ 日本人学校とのネットワーク形成
- ④ 新しい適切な教材の開発
- ⑤ 日系人子弟向けの独自教材の開発

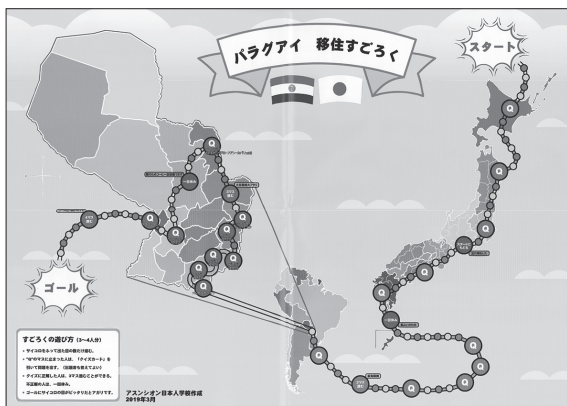
これらは大きく、「日本人学校と連携した教員研修を通しての『日本型教育』の提供と教師の力量形成」及び「日本人学校の子ども達と日本語学校の日系人子弟が共に学べる移住学習のための教材開発」の二つにわけられますが、ここでは主に後者の課題について述べたいと思います。

## 二 移住学習のための教材開発

日本とパラグアイのつながりを考える上で、日本人移住者の存在は欠かせません。一九三六年、日本からパラグアイへの最初の移民十一家族八十一人がアスンシオンから一三〇kmほどのラ・コルメナに移住しました。戦後は、日本政府直轄移住地の開設が本格的に進められました。その後、現地の受け入れや入植地の整備、移住者への農業指導を行う組織として日本海外移住振興株式会社と日本海外移住協会連合会（のちに合

併して現在のJICAの前身の一つとなる）によって直営の移住地も開かれ、一九五〇年代から六〇年代中頃に掛けて多くの日本人がパラグアイに移住し、その多くが農業に従事しました。日本人移住者が始めた大豆やトマト、メロンなどの栽培はパラグアイ人の農家にも広がり、現在パラグアイの主要な農作物になっています。アスンシオンやエンカルナシオンなどの都市ではスーパーマーケット、レストラン、旅行会社など商業界で活躍したり、弁護士、会計士、医師などの専門職に就いたりする日系人も多くいます。また、石油公団総裁や農牧省副大臣など政府の要職に就く日系人二世も出ています。先代、先々代の駐日パラグアイ大使も日系人でした。

しかし、これまで日本の学校教育において、日本人移住者について教科書をはじめ授業で取り上げられることはほとんどありませんでした。アスンシオン日本人学校の子ども達にとって、現代史において多くの日本人がパラグアイに移住した事実、彼らとその子孫の現地での苦労や貢献、継承された文化等について同じ日本人として共感を持って学ぶことは、現地理解の重要な内容でしょう。そこで同校では二〇一八年度、子



ども達が楽しんで日本人の移住の歴史や移住地での生活を学ぶ教材として、JICA横浜海外移住資料館が作成した「移民すごろく」に学んで「パラグアイ移住すごろく」の開発を行いました。これは単なるゲームとしてではなく、三十枚のクイズシートとしての活用も考慮されています。日本を出発して、船に乗りパラグアイに渡り、移住地でのような体験をして現代に至っているかという歴史的経験をクイズにしてみました。この移住すごろくは、日本語学校に通う日系人の子ども達にとっては

自身のルーツに関わる祖父母や両親の移住の歴史や経験のほか、日本人(日系人)のパラグアイへの貢献について学ぶ契機にもなります。子どもが興味を持つよう、また日本語学習の教材としても役立つように易しい日本語を心がけ、クイズシートには写真やイラスト等多用するよう工夫されました。完成した移住すごろくはアスンシオン日本語学校のほか、各移住地にある日本語学校にも寄贈し活用されています。

### 三 社会科副読本『私たちのパラグアイ(第三版)』の作成

日本においても、小学校第三・四年の社会科地域学習で用いる副読本づくりが各自自治体で行われていますが、海外の日本人学校の子ども達にとっても現地理解を進める教材として社会科副読本の果たす役割は大きいと思います。アスンシオン日本人学校でもこれまで副読本として『パラグアイ』(一九九〇年)、『アスンシオンに生きる』(一九九四年)、『わたしたちのパラグアイ』(二〇〇三年)、『わたしたちのパラグアイ(第二版)』(二〇一四年)を作成してきました。そこで二〇一九年度には、二〇二〇年度から実施される新しい学習指導要領の改訂にも合わせて

『わたしたちのパラグアイ』の改訂作業を行い、同年三月に第三版の完成を見ました。

この副読本は大きく二部にわかれていて、第一部は小学校三・四年生が社会科で学ぶ学習指導要領の内容に従って編集され、第二部は小学校四年生も含め、主に五年生から中学生を対象に子ども達が暮らすパラグアイについての理解を深めることを目的にした読み物になっています。これまでの副読本は白黒版でしたが、今回のものは全ページにカラー写真やイラストを豊富に使って魅力的に仕上げられました。

今回の改訂の趣旨について同校の加藤雅亮校長は改訂版の「はじめに」で次のように述べています。「今回の改訂で意識したのは、この副読本をアスンシオン日本人学校の子どもたちだけが使うのではなく、パラグアイの国内にある日本語学校の子どもたちも使える教材にする、ということ。日本語学校の子どもたちが日本語でパラグアイについて学ぶ。このことは、パラグアイへの理解を深めるだけでなく、日本や日本語の理解を深めることにもなる、と私たちは考えました」

このように、この副読本は日本人学校の子どもの現地理解だけでなく、



日本語学校に通う日系パラグアイ人の子どもの日本・日本語理解のための教材としての役割も果たすことを願って作られたことが大きな特色です。さらに、もう一つの特色は日本とパラグアイの関係を考える重要な歴史的事象「日本人移住」について大きく取り上げていることです。なぜ日本から多くの人達がパラグアイに渡ったのか、どうやってどんなところにいったのか、そこでどんなコミュニティ(移住地)を作りどんな仕事に就き、どんな暮らしをしたのか、パラグアイ社会にどんな貢献をしたのか等について、移住一世への興味深いインタビュー記事も取り入れながら記述されています。

日本人の移住については前述したように日本人学校の子ども達にとっても現地理解の重要な学びの一つです。同時に日本語学校に通う日系人の子ども達にとっては自身の祖父母や両親の移住の経験、すなわち家族の苦難や克服の歴史、ホスト社会にあって維持・継承してきた伝統文

化等を通して自分達のルーツについて学ぶこととなります。そのことによって日系人としての自己のアイデンティティの確立を促し、ホスト社会であるパラグアイで自信を持って生きることにつながります。

**四 副読本の内容と作成の願い**

副読本の第一部、第二部の目次は下表の通りです。

第一部では、主に小学校第三・四学年の社会科の学習指導要領の内容に準拠して、子ども達にとつての身近な地域であるアスンシオン市に焦点を当て、地域の様子、地域に見られる生産や販売の仕事、地域の安全を守る働き、市の様子の移り変わり(第三学年)、人々の健康や生活環境を支える事業(第四学年)について取り上げられています。また第二部では、日本では第五学年以上で学ぶ日本についての内容をパラグアイに置き換えて、関連する学年の学習箇所でも学べるようになっていきます。

この副読本は、前述したように日本語学校の日本語の教材としての活用を想定し、全体を通して平易な日本語にし、三年生以上で学習する漢字には全てルビをつける等の工夫がしました。また日系人の子ども達を使うことによつて、普段、学校でス

ペイン語で学んでいるパラグアイの地理、歴史、産業、文化などを日本語で学び直せるバイリンガル教育の教材としての意義もあります。

紙面の構成にあたっては、単元の最初のページに単元を象徴する写真を掲載するとともに、その下に本時で追究する「学習課題」を問いの形で示し、この単元で何を学ぶかを明示しました。また、本文の両脇にスベースをとり、本文の内容を補う解説やコラム、本文中のスペイン語などの難しい用語の解説、簡単な年表、課題の調べ方のワークシート等を載せて理解や技能の深化を図りました。

特にこの副読本で学んだ子ども達が、パラグアイに関してネガティブな認識を持たないよう、学習指導要領の目標にもある、「地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚」を持てるような記述を心がけました。

第二部では、パラグアイについての学習を通して、「世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚を養う」国際理解教育の教材にもなるよう意識しました。

**五 おわりに——今後の課題**

日本では社会科の副読本を作成する場合は、市町村の小中学校の社会

科部会に所属する社会科専門の多くの教員によつて時間をかけて作成されるのが一般的です。

今回アスンシオン日本人学校では、加藤校長先生を含む六名という少数の先生方が一年間という短い期間で、自身の足でフィールドワークし、協力して副読本を完成されたことに敬意を表するとともに

に、本書の作成に様々な協力をされた本プロジェクトのコーディネーターである平岩佐江子さんはじめ多くの皆さんに感謝申し上げます。

本書の完成と時を同じくして、パラグアイにも新型コロナウイルスの感染が広がり、アスンシオン日本人学校でもオンライン授業となり、子ども達が地域に出て学べない状況にあると聞いています。一日も早く完成された副読本を手に、子ども達が

地域のフィールドワークに出かけることができるように願っています。

また、この副読本作成の目的の一つでもある日本語学校での活用についても考えていく必要があります。そのためには本書の活用についての日本語学校の教員への研修が今後の課題となります。

第1部 私たちのくらすアスンシオン	第2部 パラグアイ共和国について学ぼう
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. わたしたちのまち みんなのまち                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 学校のまわり</li> <li>② アスンシオンの市の様子</li> </ol> </li> <li>2. はたらく人と私たちのくらし                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① スーパーマーケットではたらく人</li> <li>② 農家の仕事</li> </ol> </li> <li>3. くらしを守る                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 火事からくらしを守る</li> <li>② 事故や事件からくらしを守る</li> </ol> </li> <li>4. 住みよいくらしをつくる                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 水はどこから</li> <li>② ごみのしよりと利用</li> </ol> </li> <li>5. のこしたいもの つたえたいもの                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① パラグアイ日本人移住地の歴史</li> <li>② アスンシオン日本人学校につたわるねがい</li> </ol> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国土と自然 (小項目略)</li> <li>2. パラグアイの歴史 (小項目略)</li> <li>3. パラグアイの人々のくらし (小項目略)</li> <li>4. 産業と経済 (小項目略)</li> <li>5. 政治</li> <li>6. パラグアイの国際関係</li> <li>7. 日本とのつながり                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① パラグアイへの移住の歴史</li> <li>② 移住地探訪</li> <li>③ 一世の皆さんをたずねて</li> <li>④ 活躍する日系人の皆さん</li> <li>⑤ 日本とパラグアイの経済・文化交流</li> <li>⑥ パラグアイにある日本の機関</li> </ol> </li> </ol> <p>参考資料</p>